

夏目漱石と奥太一郎

福岡女学院大学名誉教授(日本近代文学) 原 武 哲

一

夏目漱石(金之助)が熊本第五高等学校教授当時、英語教師として招聘しようと奔走し、五高に迎え入れた1人の中学校教師がいる。奥太一郎おくたいちろうという。奥は謹厳実直な男で、生涯漱石に恩義を感じ、五高在任中は同じ英語科の一員として忠実に漱石と交友し、小天温泉おあま・日奈久温泉ひなぐや耶馬溪旅行やまけいを共にしたり、加賀宝生の謡曲を一緒に習ったりした。温厚な人物で、目立たず派手なところがないので敵はなく、同僚や教え子から敬意を払われた。五高に16年間勤務し、1914(大正3)年2月、満43歳で五高依願免本官を機に一切の官学から身を引き、私学に移った。その後も終生五高に招いてくれた漱石に恩義を忘れず、作家となった漱石に近況を報告し、五高の英語人事などでも相談し、上京の折に漱石山房を訪ねたこともあった。

岩波書店『漱石全集』第22～24巻「書簡 上・中・下」(1996年3月19日・9月19日・1997年2月21日)によると、奥太一郎宛の漱石書簡は10通収録されている。しかし、漱石宛の奥書簡は多数あったと想像されるが、漱石は年末に書簡をまとめて焼却していたので、現存しない。少ない資料ではあるが、漱石と五高英語科で2年3ヶ月間同僚だった奥太一郎との交流を中心に考察してみよう。

二

奥太一郎は、父^{*1}輝太郎(旧名石川数馬。明治維新後、改名)、母まつ(あるいは美恵のいずれか)の次男として生まれた。輝太郎は岩倉具視の家臣だったので、代々京都に暮らし、維新後は岩倉に随伴して東京との間を往復したことと思われる。兄は^{*2}亀太郎、弟は^{*3}菊次郎という。

第五高等学校(現・熊本大学)・活水女学校(現・活水女子大学)の履歴書によると、奥太一郎は「原籍 東京市京橋区松屋町3丁目17番地」「^{*4}東京府^{*5}平民」で、1870(明治3)年5月23日(活水履歴書では22日)、^{*6}京都で生まれた。1882(明治15)年12月、京都市下京区公立^{*7}永松小学校において中等科全課を卒業した。83年1月、京都市私立^{*8}明倫館に入り、同年9月まで漢文学を修めた。幼年時代から兄弟はキリスト教に親しみ、教会に出入りして日曜学校に通い、兄亀太郎は新島襄から洗礼を受け、同志社に入学、81年には卒業したので、太一郎も自然にその感化を受け、洗礼を受けたものと思われる。太一郎は83年9月、京都市私立^{*9}同志社学院に入り、5年間普通学を修め、88年6月、京都市私立同志社学院において英語普通科を卒業した。

88年10月、群馬県碓氷郡原市町私立^{*10}碓氷英学校教頭となり、英語および数学を教授し、90年3月、同校教頭を辞職した。内村鑑三が辞任した「北越学館事件」後の90年4月、新潟県新潟市私立^{*11}北越学館教授となり、英語・数学・経済学などを教授し、92年3

月、同校教授を辞職した。同年4月、そのころ岩野泡鳴(美衛)が生徒として在籍していた宮城県仙台市私立^{*12} 東北学院教授となり、英語・歴史・社会学などを教授し、93年3月、同校教授を辞職した。『東北学院七十年史』には「明治26年3月 奥太一郎先生送別会記念」(101頁)の集合写真があり、東北学院予科3年生および教員35名が写っている。珍しいのは押川方義院長、押川方存(後の春浪)がいることである。ただし、岩野泡鳴は写っていない。島崎藤村(春樹)が東北学院に赴任する3年半前のことである。

93年7月、英文科を卒業した夏目漱石と入れ替えに、同年9月、奥太一郎は^{*13} 帝国大学文科大学哲学科(選科)に入り、三年間^{*14} 撰科生として哲学を修めた。96年6月10日、英語の科目に就き検定試験を受け、^{*15} 尋常中学校・高等女学校・^{*16} 尋常師範学校教員の免許を授与された。同年6月20日、岡山県津山尋常中学校雇教員に任命され、月俸60円を受け、同年7月29日、岡山県津山尋常中学校教諭に任ぜられた。同年12月1日、尋常中学校倫理科・高等女学校修身科教育科・尋常師範学校修身科教育科教員の免許を授与された。1897年5月25日、帝国大学文科大学より修業証書を授与せられた。五高教授夏目漱石を窓口として、第五高等学校英語科教員に招かれたので、1898年3月31日、願いにより岡山県津山尋常中学校教諭を免ぜられた。

1898(明治31)年4月4日、^{*17} 第五高等学校英語科の講師を嘱託せられ、報酬として1ヶ月65円を贈与せられた。同年10月11日、第五高等学校教授に任ぜられ、^{*18} 高等官7等に叙せられ、10級俸を下賜せられた。同年12月10日、従7位に叙せられた。99年9月19日、工学部英語科主任を命ぜられた。同年12月16日、舎監心得を命ぜられた。同年12月22日、高等官6等を陞叙せられた。^{しようじよ} 1900(明治33)年1月22日、第五高等学校舎監を兼任せられ、9級俸を下賜せられた。同年2月20日、正7位に叙せられた。02年4月5日、8級俸を下賜せられた。03年1月21日、高等官5等を陞叙せられ、同年4月20日、従6位に叙せられた。同年10月16日、大学予科評議員を命ぜられ、11月16日、大学予科担任(舎監)を命ぜられた。06年5月31日、7級俸を下賜せられ、同年10月6日、高等官4等を陞叙せられ、同年12月27日、正6位に叙せられた。07年6月15日、第五高等学校生徒監を兼任した。10年4月15日、文部大臣小松原英太郎より「明治三十一年四月 第五高等学校講師トナリ 尋イデ現官ニ任セラレシヨリ今日ニ至ルマデ 前後十二年ノ間未ダ曾テ一日ノ欠勤ナク 職務ニ尽瘁スルコト終始渝ラズ 其ノ勤勉励精 洵ニ教員ノ模範トスベシ。仍テ特ニ之ヲ嘉賞ス」と賞状を授与された。同年9月15日、生徒課主任を命ぜられた。同年11月30日、6級俸を下賜された。同年12月26日、勲6等に叙せられ、^{*19} 瑞宝章を授けられた。11年1月25日高等官3等を陞叙せられ、同年3月20日、従5位に叙せられた。1913(大正2)年3月17日、第五高等学校生徒監を免ぜられ、同年3月20日、生徒課主任を免ぜられた。14年2月6日、4級俸を下賜せられ、願いにより本官を免ぜられ、正5位に叙せられた。

1914(大正3)年2月20日、長崎市私立^{かつすい} ^{*20} 活水女学校教頭となり、英語・修身・教育学を担当した。19年4月、長崎市私立活水女子専門学校教授を兼任し、20年8月31日、活水女学校教頭ならびに活水女子専門学校教授を辞任した。

1920(大正9)年9月より、^{*21} 九州学院教頭となり、修身・英語を担当し、神学部の英文学も兼任した。五高時代の同僚だった^{さぶろう} ^{*22} 遠山参良院長の誘いによるものだった。1923(大正12)年3月、九州学院教頭を辞任した。

23年4月、^{*23}日本女子大学校教授として東京に赴任した。5年間、日本女子大学校に勤め、現職のまま、1928(昭和3)年10月13日、59歳で死去した。

三

夏目漱石が奥太一郎を知ったのは、1897(明治30)年7月、夏期休暇中、帰京して五高英語科教師1名人選のため、候補者選定に着手した時である。友人の^{*24}狩野亨吉(第四高等学校教授退職後、浪人中)、^{*25}菊地謙二郎(千葉県尋常中学校長)などと相談して人選を進めていた。第一候補者^{*26}赤木通弘(帝大文科大学哲学科1897年7月卒業。宮崎県出身)は狩野の事前調査も良好だったので採用になり、9月から赴任して来たが、赤木は万事控えめな謙譲の極みとも言うべき人物で弁論の才に乏しく、論理学の講義は不分明という評判で生徒の質問にも応ずることができない有様、とうとう12月上旬、本人より辞表が提出され、神経質と眼病の理由で辞任となった。

そこで五高では98年4月から英語教師を1名採用することになり、97年3月まで津山中学校長だった菊地謙二郎を通じて候補者選定を進め、赤木採用時候補に挙がっていた奥太一郎(96年6月から津山中学に菊地校長の下で勤務)を再度候補に挙げ、性行・学力その他の調査と本人の意思確認を求めた。しかし、既に半年もたって前の人事を再度組上に挙げたので、漱石は名前を失念し、「^{*27}奥泰二郎か」と記憶違いを犯している。当面、赤木の後任に狩野亨吉自身が教頭となり、英語・論理学を担当することで、98年1月熊本に赴任した。しかし、教頭職で授業を担当しても英語の授業時数が不足する。奥太一郎は、菊地謙二郎、選科生当時の恩師^{*28}神田乃武(帝大教授。ラテン語)の推薦により4月(第2学期)採用英語教師の第1候補となり、^{*29}月俸65円、当分嘱託の条件で諾否を求められた。津山中学校教諭である奥は、前任者赤木通弘辞任の経緯も仄聞していたのであろう、九州男児の蛮カラ風剛毅粗野に対して自身の温厚な性格で対処できるか不安を感じたらしい。^{*30}3月18日、「やむを得ざる事故^{しゅつたい}」が出来たという理由で転任ができないと断ってきた。そこで、漱石は奥のみを推挙して文部省に上申するばかりになって、承諾の返電を待っている。ここに至って断られては英語科主任としての信用失墜はともかくとして、校長^{*31}中川元や教頭狩野亨吉の迷惑は当然のことと思われる。どうかご再考願いたい、と返信を送った。それで、奥も考え直したのであろう、無事3月末、津山尋常中学校教諭を依頼免官になり、4月4日、英語科嘱託として第五高等学校に赴任した。この五高着任における漱石の配慮は、奥太一郎の心情に後々まで感謝の念として残った。

夏目鏡子述・松岡讓筆録^{*32}『漱石の思ひ出』8「『草枕』の素材」によると、1898年(明治31)年蚕のころ(5、6月ごろか)、狩野亨吉・^{*33}山川信次郎・奥太一郎・^{*34}木村邦彦・漱石の5人で朝早く小天温泉に行き、^{*35}前田案山子(覚之助)別荘(湯の浦)で昼食をしたため、長女^{*36}前田卓子の案内で本宅を見た。岩戸観音・鼓ヶ滝などを見て、卓子は河内まで見送った。奥太一郎が漱石と旅行したのは、多分これが最初であろう。なお、漱石が『草枕』の素材を得た旅行は、その前年97年12月27、28日ごろから翌98年1月3、4日ごろにかけて、山川信次郎と共に小天温泉の前田家別荘3号室(現・漱石館)に泊まった時の体験である。従って、奥たち5名で行った小天旅行は漱石にとっては2回目に当たる。

夏目鏡子の『漱石の思ひ出』「10 長女の誕生」によると、

「例のとほり元日から同じ学校の奥太一郎さんと御一緒に、年来の希望であつた耶馬溪へと旅立ちました。旅の様子は知りませんでした、家へ帰る前日か前々日のことでありませう。豊後の日田あたりの峠で馬に蹴られて雪の中に倒れたといつて、いやなしかめつ面をして帰つて参りました。それから無暗と歩いたものとみえて、足にまめをこしらへてをりました。山の中の旅行のこととて、鳥だといつては兎らしいものを食はせたなどと大分不機嫌でしたが、帰つてからまた例のとほり沢山句を作つて、子規さんの許へ送つてをりました。」

漱石は1889(明治22)年8月、友人5人と千葉県鋸山に登った時、大分県人川関某が「耶馬溪広袤数十里、岩壑之奇、固不止于此、而羅漢之勝、遂不能及焉」と郷里の耶馬溪の広大さと峻険さを自慢誇示したことを、『木屑録』に漢文で書き、「自是寺以羅漢著、遊者或比之豊之耶馬溪云」と九州の耶馬溪に憧憬を抱いた。

熊本の五高に赴任した漱石は、かねて耶馬溪を探勝したいと思っていたが、1897(明治30)年6月29日、父の直克が84歳で亡くなったので、夏期休暇中の北部九州旅行は中止せざるを得なくなり、試験終了後、7月早々上京した。その後も念願の耶馬溪探勝の機会がなかったが、やっと心許す弟分の奥太一郎を得て、耶馬溪俳諧行脚の機が訪れた。

1899(明治32)年1月1日、漱石は³⁷元日の屠蘇を酌んで、熊本市内坪井町の自宅を出発し、奥太一郎と共に池田駅から乗車、博多・小倉を経て、宇佐八幡宮(宇佐に行くや佳き日を選ぶ初曆 漱石)・耶馬溪に向かった。1日は小倉泊まり(うつくしき蟹の頭や春の鯛 漱石)、2日は宇佐八幡宮(ぬかづいて日く正月二日なり 漱石)に参詣し、四日市町(現・宇佐市)に泊まる。3日、曹洞宗羅漢寺(大分県下毛郡本耶馬溪町)に参詣(巖窟の羅漢共こそ寒からめ 漱石)し、口の林(現・耶馬溪町平田。短くて毛布つぎ足す布団かな 漱石)に泊まる。4日は念願の耶馬溪(石の山尻に吹かれ裸なり 漱石)を観たが、頼山陽があまり賞賛しすぎたためであろうか、それほどまで名勝とも思わなかった。

この時の体験は、『彼岸過迄』「風呂の後3」に利用された。柿坂(現・耶馬溪町柿坂。道端や氷りつきたる高箒 漱石)を経て、守実(下毛郡山国町守実、たまさかに据風呂焚くや冬の雨 漱石)に泊まった。5日、吹雪中、大石峠(日田街道。豊前国下毛郡と豊後国日田郡との国境)を下る時、馬に蹴られて雪の中に転んだ(1899年1月14日付狩野亭吉宛漱石書簡。漸くに又起きあがる吹雪かな 漱石)。日田市(吹きまくる雪の下なり日田の町 漱石)を通り、吉井(福岡県浮羽郡。現・うきは市。なつかしむ衾に聞くや馬の鈴 漱石)に1泊。6日、追分(久留米市山川町追分)の立て場で車夫から「親方、乗って行かんのう」と誘われた(親方と呼びかけられし毛布哉 漱石)。追分の体験は後に『坊っちゃん』3「ケツトを被つて、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云はれた。」に利用された。漱石・奥は久留米駅から汽車に乗り、池田駅に帰った。

この耶馬溪旅行こそ唯一の漱石・奥太一郎2人旅であり、忘れがたい思い出の旅であった。しかし、この吟行は奥太一郎の存在感が全く感じられない。漱石が豊前豊後国境の峠で馬に蹴られて雪中に倒れたことはあったが、奥には取り立てて語るべきエピソードはなく、彼の俳句は1句も残っていない。漱石は1899年1月、正岡子規宛に「つまらぬ句ばかりに候 然し紀行の代りとして御覧可被下度 冀くは大兄病中烟霞の僻万分の一を慰

するに足らんか」と俳句 75 句(内、66 句は耶馬溪紀行中のもの)を送り、子規の斧正を請うているが、奥太郎作の句は 1 句も含まれていない。漱石のことであるから、奥にも作句を慫慂したと想像されるが、遂に子規に添削を乞うほどの自信作はできなかったということであろう。

夏目鏡子の『漱石の思ひ出』「10 長女の誕生」には、奥との交流について、次のようなことも書き残している。

「奥太郎さんともよく行き来をしてみました。夏目もの頃謡を始め、奥さんも同じく謡をやつてをられたので、謡の会などでも落ち合つてたやうです。夏目の謡の先生といふのは、同じ五高で工学部長をしてをられた^{*38} 桜井房記さんが金沢のはうの方で、そこで加賀宝生が御上手とあつて、どういふ拍子で呻り出したものか、「紅葉狩」かを教へて戴くことになったのですが、大層質がいいとお賞にあづかつて、自分ではしきりに得意で大きな声を出して呻つてをりました。けれども根つからいい声らしくも思へないので、桜井さんにほめられたつて、そりゃおだてで、なつてゐないぢやありませんかなどと、いつもの悪口の讐でも取る気で浴せかけたものです。すると俺のもそんなにいいと思つてゐるわけではないが、まあ、奥のをきいてみる。お湯の中で屁が浮いたやうなひよろひよろ声を出すんだから、あれからみればといつた具合に、なかなか負けません。そこで奥さんは奥さん、貴夫は貴夫。人がどうあらうとその声は自慢になりませんよなどと憎まれ口を叩いてをりますと、ある日奥さんがいらして謡が始まりました。私は丁度お湯に入つてゐたのですが、さあ、始まると困つてしまひました。まったく珍妙な謡ひ声なのですが、それよりもすぐとさきの尾籠な批評を思ひ出したからたまりません。たまりかねてお湯の中で手拭を口に当ててきこえないやうに笑つてをりますと、台所でも女中たちが笑ひをこらへてゐるのですが、これも笑ひがとまらず、えらい苦しみをしたことがあります。」

とある。2 人の交流が謡曲を通じて非常に親密であつたことがうかがえる。この時の基礎があり、漱石は 1907(明治 40)年 11 月から 1916(大正 5)年 4 月ごろまで、宝生新から謡を習った。奥太郎がその後も謡を続けたかどうか、わからない。

1899(明治 32)年 6 月、^{*39} 第五高等学校卒業記念写真を撮っているが、前から 3 列目 2 人目が帽子をかぶらず首を傾けた漱石、6 人目には口髭を蓄えた奥太郎が写っている。

1899(明治 32)年 7 月 12 日、漱石は狩野亨吉に宛てて^{*40} 書簡を送り、帝大生以来の友人で漱石が五高に招いた山川信次郎が第一高等学校転任に際して年俸をいかほどにするか、相談した。そのついでに山川の後任として茨木清次郎が候補に挙がっていたが、性行・学術の点で人物調査を狩野に依頼した。茨木が教室の授業経験がなくとも充分生徒を指導するだけの才力があるかどうかを尋ねている。その際、知りたい条目を「人物 奥流なるや木村流なるや」「学問 学者的なるや通弁的なるや」と例を挙げて聞いた。「奥流」とは奥太郎のような温厚篤実、謹厳実直な人物と思われる。「木村流」とは木村邦彦のような人物と思われるが、一体どのような人間像だったのか。英語担当でクリスチャンの木村邦彦は 1898 年 8 月 19 日講師となり、99 年 9 月 5 日教授に昇格、1901 年 5 月 29 日に在職 3 年足らずで離任している。従つて、多分奥太郎と対極的な人物像を想定しているもの

と思われる。

1899(明治32)年7月、五高舎監だった奥太一郎は、^{*41}熊本女学校(後の大江高等女学校。現・熊本フェリス学院高等学校)の校長^{*42}竹崎順子(徳富蘇峰・蘆花の伯母。横井小楠妻津世子の姉)の肝煎で同校舎監だった菅沼きく子(本名はキクであろう。当時の例のごとく、きく子、菊子と通称した。熊本女学校1896年3月26日卒業)と結婚した。1887(明治20)年10月、竹崎順子が洗礼を受けた時、奥太一郎の兄・奥亀太郎(同志社出身)は^{*43}熊本草葉町教会牧師であった。奥太一郎も菅沼きく子も舎監同士であったこと、2人ともクリスチャンであったことなどから、竹崎順子が仲介したものと思われる。順子は奥を訪問、「きく子が病気ばかりして、相すまぬ」と懇ろに詫びたという。奥太一郎が98年4月、五高に赴任するについては、兄亀太郎が1886(明治19)年12月、伝道師として熊本に来て、この時既に熊本を去っていたが、兄縁りの地として大層心強く頼りにして着任したのであろう。きく子は竹崎順子の夫茶堂(律次郎)の門人菅沼安隆と徳富蘇峰・蘆花の長姉常子との間に生まれたが、母が同棲2年で不縁になったため、七夜のうちに母の乳房から父の許へ引き取られた。継母が来て、異母兄弟が生まれた。1893(明治26)年6月23日、竹崎順子は亡くなった孫菊子(娘節子の娘)と同じ名を持つ菅沼きく子を引き取り、熊本女学校に入学させた。きく子は学資が得がたかったので、昼食の炊事をして食費を補助され、折々の使いをして授業料を免除された。水俣から「きく」の名を持つ新入生が2人来た時、順子は、

水俣より二人のきく子まいらるゝとて
時しあれば菊の二本咲き出でて託麻の原に香匂ふなり

と孫菊子が死んで、新たに二本の菊が香る嬉しさを率直に悦んだ。^{よろこ}

きく子は1896(明治29)年3月26日、第5回卒業生(4名)として卒業後も竹崎順子の側に侍し、一時、退職していたが、1897(明治30)年3月、竹崎順子が積年の衆望辞するに途なく、73歳の高齢で校長になり、きく子も舎監として女学校に復帰した。きく子の両親(菅沼安隆・常子)の媒酌をしたが、離縁になり、不憫に思っていた竹崎順子は、きく子を孫の生まれ変わりとして、優しくそして厳しく指導し、五高の奥太一郎に未来を託したのであった。奥きく子はその後も夫・奥太一郎と共に熊本女学校の熱烈な後援者として、竹崎順子を助け、母校の危機を救い、発展に寄与した。キリスト教徒としても、日本福音ルーテル教会熊本教会に所属し、1921(大正10)年2月24日、九州学院教会が設立されてからは、夫太一郎と共に九州学院教会に移籍した。東京移住後も東京教会で堅実な信徒としての良風を長く後進の間に遺したという。若い頃は蒲柳の質であったため、師竹崎順子を心配させたが、後に壮健になり、夫太一郎より長寿を保ち、^{*44}84歳まで確認できるが、没年は未詳である。

1900(明治33)年1月、冬季休暇を利用して、五高教授の漱石、奥太一郎、小島伊佐美(独逸語)たちは日奈久温泉に行き、旅館^{*45}浜屋の2階で謡の稽古をした。

1900(明治33)年5月、夏目漱石は英語研究のため、文部省第1回給費留学生として満2ヶ年イギリス留学を命じられた。イギリス留学が五高校内で公表されると、教師・生徒の間で送別会が開かれた。重富写真館(熊本市明石橋16番地)では送別記念写真が撮られ

た。その1枚に奥太一郎と一緒に撮影したものがあ。東京都品川区の串田武彦氏所有のアルバムより複写したものが、『漱石の四年三ヵ月 くまもとの青春』(96 くまもと漱石博推進100人委員会)に転用されている。それによると、4名が写っており、前列右は羽織袴で口髭をピンと張った威厳のある漱石、前列左は羽織袴を着て口髭と顎鬚をつけた小柄で温厚そうな奥太一郎が腰掛けている。後列右は羽織袴を着た坊主頭の学生、左は学生服を着て七三に分けた長髪の学生が立っている。2人の学生の紫溟は未詳。漱石・奥の交友を偲ばせる写真である。

漱石は7月に家財道具一切を処分して熊本を離れ、東京に帰り、洋行の準備をした。漱石は第五高等学校教授の身分のまま留学するので、本来、熊本に帰任する義務がある。しかし、でき得れば東京で職を得たいと思い、熊本への退路を断ってしまった。奥太一郎とも懇ろに別れを告げ、その後2人が同僚として職場を共にすることは二度となかった。漱石は1900年9月8日、横浜から^{*46}藤代禎輔・^{*47}芳賀矢一・稲垣乙丙(農学)・戸塚機知(軍医学)らとドイツ船プロイセン号で留学の途に就いた。

四

1901(明治34)年2月25日、奥太一郎は第五高等学校から^{*48}「学術上取調ノ為メ長崎福岡佐賀大分地方へ出張ヲ命ズ」という辞令を受けた。1901年2月27日、池田駅を出発、大分県中津中学校、福岡工業学校、福岡県修猷館、長崎県玖島学館、第五高等学校医学部(長崎)、長崎中学校、私立鎮西学館、私立活水女学校、佐賀県第一中学校、福岡県明善校、福岡県伝習館を訪問し、3月8日池田駅に帰着した。3月18日、中学校英語授業や寄宿舎を参観した^{*49}復命書を提出した。

夏目漱石の留学中、1901年7月22日、奥太一郎から近況を知らせる^{*50}便りがロンドンにもたらされた。漱石留学中の奥書簡は現存しないので、これ以外に送ったかどうかかわからない。

漱石は約2年間の留学期間を経て、1902年12月5日、日本船博多丸でロンドンを出発、帰国の途に就いた。03年1月20日^{*51}長崎入港、23日神戸に上陸、神戸駅から汽車で24日新橋駅に到着、東京市牛込区矢来町の岳父^{*52}中根重一方に落ち着いた。

帰国後、漱石が奥太一郎に送った最初の書簡は、^{*53}03年3月8日付のものである。やむを得ざる事情で熊本に帰任せず東京にとどまることになったお詫びと、遠山参良(五高教授。英語科主任)その他によろしく伝えてくれ、^{*54}スウィートは好評で安堵した、^{*55}ファーデルは解雇の由気の毒に思う、桜井房記校長が周旋の労をとっていると推察されるが思わしい就職口がないのは残念、「大兄は依然寄宿の方へ御関係に候や」など伝えた。

その後、奥太一郎から漱石に熊本五高の状況が報告されたのであろう。^{*56}同年4月13日、その返信でスウィートが熱心に職務に尽力しているようで満足の至りに堪えず、採用当時(漱石ロンドン留学中、1901年6月8日、ロンドン大学のヘールズ教授の紹介でスウィートに面談、五高英語教師に推薦)別段の知己でもなかったもので、幾分の危険を冒して

周旋したが、このような熱心家を得て幸せに思う、感謝の意を伝えてくれ、自分のような者がいても五高のためにもならないだろうから遠山参良らと共に尽力してくれ、と激励した。

^{*57} 同年7月3日、漱石は奥太一郎に、入学試験で毎日朝7時より出勤している、高校と大学の掛け持ちで両方とも碌なことはせず、「勝手好加減主義」でやっている、「大兄などの様な真面目な人」から見れば、墮落の極みであろう、と手紙を書き送った。奥が漱石から「真面目な人」と書かれているのを見ると、やはりそうかと納得させられる。

漱石は、当時第一高等学校講師と東京帝国大学文科大学講師を兼任し、超多忙であった。1905(明治38)年10月6日、『吾輩ハ猫デアル』(上篇)が大倉書店・服部書店から出版され、20日間で初版は売り切れた。『蕙露行』を執筆中の同月20日、奥太一郎に^{*58} 書簡を寄せ、「熊本も永く居ると存外あきる所に候が大兄の如き人は始終一日の如く御勤めにて敬服の至に不堪」と奥の勤勉と誠実さに感心している。引き換え、自分のごときは教師がいやで生涯悟れない業突く張りである、人は大学講師をうらやましく思うそうだが、金と引き替えならいつでも譲りたく思う、と心境を吐露している。奥の娘(名は未詳)の誕生に因んで、子どもはなかなか容易に成長しないようであるが、ずんずん伸びて行くには驚くこともある。後から子どもに追いかけてられているような気持ちだ。最近は多忙なのに来客ばかり日々2、3名もあり、閉口しているため、5、6人に手紙を出して当分は来てはいけないよと言ったところ、その翌日その1人がすぐ来た。高等学校は楽なものだ、自分は高等学校で食って余暇に自分の好きなことをしたいと思っている。「舎監杯は一日も致すべきものに無之と存候」は、奥が永年舎監や生徒監をやって来たことに対する律儀さに感服しているのであろう。第一高等学校は熊本よりだいぶ気楽で、同僚の家に行くこともなく、先方から来ることもない。大学もその点はすこぶるのんきなものだ、と書いている。思うに、文名が挙がるにつれて、同僚との交際は敬遠されて希薄になり、教え子たちは慕い寄って来るという現象が起きたのであろう。「閑窓に適意な書を読んで随所に山水を放浪したら一番人生の愉快かと存候」は教育と創作の二足の草鞋を履いた超多忙の苦痛から脱出して、自然の中で読書三昧に浸る閑適への渴望である。「小生は教育をしに学校へ参らず月給をとり参り候。自余の諸先生も正に斯の如くに候」は気の置けない謹厳な奥を相手に、いささか誇張して偽悪的に本音を吐露したものと思われる。

1906(明治39)年12月22日、^{*59} 奥太一郎からの書簡に対して、夏目漱石は返信を出した。「大多忙にて始終齷齪致し居り」と二足の草鞋に悪戦苦闘して、教師稼業からの脱出を模索していた。「学校も何だか○○○○○○○○○○○○○○○○と存候 右については○○○○○○○○○○○○○○○○参り候由先日去る所より承はり候」は第五高等学校の近況を奥が報告したものに対して漱石が、別ルートからも聞き、意見を述べたものと思われる。この伏せ字は岩波書店『漱石全集』大正6年版(第1回)以来の伏せ字である。その内容はわからないが、一般的に伏せ字にする場合、^{わいせつ} 猥褻なもの・反国家的なもの・皇室に関するもの・反体制的なもの・個人を誹謗中傷するものなどが考えられる。ここは五高内の個人の消息や人物評価・^{ひぼうちゆうしやう} 毀誉褒貶に関するもので、編集委員会の判断で伏せ字にしたと思われる。その原資料の書簡は所在が不明(奥宛漱石書簡10通のうち5通は熊本近代文学館に所蔵されている)で確認することができないが、伏せ字の部分が判読不能というわけではなからう。いずれにしても、このような個人の秘密に属するものを共有

するほど 2 人は親密であったということである。漱石は東京で孤独、校長が変わろうと学長が変わろうとすこぶる呑気^{のんき}である。「東京は広い所に候」といっているのは、『三四郎』の^{*60} 広田先生の言葉を思い出す。

「^{*61} 俣野義郎の事は面白く候」の俣野は漱石・奥共通の教え子で、『吾輩は猫である』に出てくる多々良三平のモデルであると噂され、漱石に 5、6 度も親展至急で嚴重抗議を申し込んで来た男である。会社(三井鉱山)で俣野を「多々良君」と呼ぶ者がたくさん現れて迷惑しているので、ぜひ取り消してくれと請求した。「多々良三平は俣野義郎にあらずと新聞に広告してはいけないか」と照会したら、いけないという。俣野が三平に誤られるのは、双方とも筑後久留米の住人だからである。せめて三平の戸籍だけでも肥前唐津に移してくれといってきたので、漱石は三平の方を「肥前の国は唐津の住人多々良三平」と改めたことを指している。このことは『満韓ところどころ』11 や、1905(明治 38)年 2 月 31 日付鈴木三重吉宛漱石書簡にも俣野義郎の多々良三平騒動について触れている。

五

1907(明治 40)年 3 月、東京帝国大学講師と第一高等学校講師を退職し、4 月、東京朝日新聞社に入社した。専属作家として『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に小説を連載することになった。奥太一郎は漱石の教育者から小説家への転身について大いなる期待と激励を送り、第五高等学校改革などの近況を報告した。これに対して^{*62} 同年 5 月 29 日、奥に返信を送り、五高改革後、諸事旧に復し当分は無事、結構である。公職退職後は灌花栽培の楽しみもあるそうで、閑適の余事風流羨ましい限りである。自分は大学を退職後、小説家となり、講義の必要もなく、高等学校の下調べのためセンチリー辞典の厄介になることもなくなり、心中大いに愉快である。今の住居(駒込西片町)の前後にすこしばかりの庭園がある。四季の眺めというほどのこともないけれども、見るもの悶えを晴らす花樹もあり多少得意である。人生 50 年流転のうちに残喘余命を託する身がいつ何時いづこへ転居するかも計りがたく、昔の人は 1 戸を構えるのを 1 人前の証拠のように言いはやしているが、必ずしも語弊とまでいえないであろう。毎日書齋で読書冥想、昼寝も時々している。しかし次から次へと雑用ができ、心は案外平穩ではない。子どもも見る間に成長した。何となく後ろから追いかけられるように思われる。早く何事かを成し遂げて生涯を終えたい。1 日が 48 時間になるか、脳が 2 通りできるか、いずれかにしたい。しかし、半生の鴻爪^{こうそう}(自分の生きてきたこれまでの足跡)は全く痴夢に等しく、このまま枯れ木となっても苦しからず、そう観念して開き直ると、呑気になる。漱石は教師から作家への人生の一大転機に当たって、大事業を成し遂げるか、このまま「枯れ木」で終わるか、気の置けない奥を相手に飾らない真情を吐露したものと見える。

1908(明治 41)年 8 月、第五高等学校教授奥太一郎は五高の英語教師を探しに上京した。夏目漱石に相談するため、早稲田南町の漱石山房を訪問した。同月 16 日、五高の教え子だった^{*63} 寺田寅彦は漱石宅を訪問した時、五高が英語教師を探していると聞いた。寺田はその日午後、16、7 年ぶりに面会した藤田貞次が教師の口を探していたので、藤田を奥に推薦しようと奥の宿所を探した。奥の宿所はわからないが、目白の日本女子大

の⁶⁴麻生正蔵が知っているかも知れないというので、寺田は麻生に問い合わせの手紙を出した。同年19日、寺田は奥の宿所を聞くため、前第五高等学校長桜井房記、前第五高等学校教頭⁶⁵渡辺又次郎および第一高等学校に行き尋ねたが、わからなかった。漱石山房を訪ね、対策を相談する。翌20日、寺田は奥太一郎の宿所を聞きに日本女子大学校晩香寮に麻生正蔵を訪問したが、やはり、わからない。徳富(名は不明。蘆花か)方へも問い合わせたが、わからない。漱石山房に廻ると、一高の⁶⁶森巻吉と⁶⁷西村濤蔭が来合わせていた。昼食を食べながら、相談をする。22日、奥から寺田に葉書が来た。桜井房記方で寺田が奥を宿所を尋ねていることを聞いて、知らせて寄越して来たものである。22日朝もしくは23日朝9時までに来るよにとのことであった。翌22日、寺田寅彦は朝6時40分巢鴨発の汽車で大久保に行き、奥太一郎を訪問した。昨夜は外泊したそうで、しばらく待った。9時ごろ奥は帰宅、10年ぶりに寺田に面会した。寺田は五高英語教師選考の件で藤田貞次推薦を依頼したが、藤田のことは既に⁶⁸由比質^{ただす}より聞き知り、候補者の1人になっている由である。帰りに漱石を訪ね、経過の報告をした。しかし、寺田の推薦した藤田貞次は五高に採用されず、同年10月25日夜、藤田が寺田を訪ね、近日中に熊本県八代中学校に赴任することが決まったと報告した。

1909(明治42)年7月31日、漱石は奥太一郎から照会文を受けた。誰の問い合わせなのか、わからない。やはり、人事に関する照会であろう。

1910(明治43)年6月18日、血便反応があり、胃潰瘍の疑いがある漱石は、麴町区内幸町の長与胃腸病院に入院した。7月30日、奥太一郎が熊本から出京して、長与胃腸病院に漱石を病気見舞いに訪問した。翌31日、漱石は長与胃腸病院を退院した。同年8月6日、転地療養のため、修善寺に向かい、同月24日、大吐血し、「30分の死」を体験した。いわゆる修善寺の大患である。

かねて熊本の福音路帖教会では宣教師宅を教室としたり、東子飼町の仮教室で神学の学習を続けたりして、神学校設立を準備していたが、ようやく1911(明治44)年4月15日、熊本市外大江村字本で開校式をあげた。九州学院が男子中学校として開校したので、九州学院内に移転し、九州学院神学部となった。九州学院初代院長 遠山参良^{さぶろう}、主事 C. L. ブラウンを中心に教職員の人選が進められ、五高教授 奥太一郎も非常勤で予科生に心理学・論理学を教えた。

六

1898(明治31)年4月、岡山県津山中学校から第五高等学校に着任して以来、16年間精励^{せい}恪勤した教授奥太一郎は、1914(大正3)年2月6日、満43歳で官学を退き、私学に転進した。すなわち、長崎の私立活水女学校に教頭として迎えられ、英語・修身・教育学を担当した。奥は活水女学校への転出を夏目漱石に知らせた。漱石から丁寧なるお祝いの返信が来た。

拝復 今度愈御辞任の上長崎の方へ参られることになりたる由拝承致候 大兄の熊本行は実は小生の推薦の由 それは御手紙にて漸く思ひ出したる位十六年の昔故それも道理かと存候 然し大兄は小生の配慮を恩義の如く感ぜられわざわざの御手紙 小

生は甚だ恐縮致候 小生在熊中こそ種々御世話に相成 御蔭にて左したる公務上の不都合もなく無事に引上げ候段深く感謝致居候 大兄も十六年後の今日漸く別方面へ活動の余地をつくる為めの御転任なれば小生はたゞ心中より喜び申候 長崎着の上は女子教育の方にて充分の御成効乍蔭切望致候 先は右御挨拶迄 匆々頓首

二月八日

夏目金之助

奥太一郎様

奥は漱石の推薦によって五高に採用されたことを恩義に感じ、終生忘れなかった。だから、節目節目の消息を欠かさず、礼を尽くしていたのであろう。採用時にお世話になったことはそのつど触れることはなかったけれども、今度五高を退職するに当たって、漱石のお蔭で官学に勤務することができた感謝の言葉を書いたものと思われる。漱石は自分の推薦で奥が五高に採用されたことを失念していたのを思い出した。そして、私学の女子教育で新天地を開き、別方面の飛躍を期待し、祝福を送ったのである。長崎での住所は活水学院の履歴書によると、長崎市今町39番地であった。

奥太一郎の活水女学校教頭就任は、活水学院高等教育の将来像と関連があったようである。つまり、高等科を発展充実させ、⁶⁹ 活水女子専門学校設立を志向し、教師陣を増強していた。先ず外国人宣教師を7名内外に増加した。また従来中等科高学年からラテン語、高等科からギリシャ語、第二外国語としてドイツ語も学ばせていた。しかし、1914(大正3)年6月、古典語、ドイツ語を廃止し、専門学校設置認可申請書では外国語は英語だけとなり、授業時数は英文科予科1年で15時間、2年で12時間、本科で10～12時間と、英語に集中された。だから、英語教師の増強が急務になったのである。従って、奥太一郎の教頭就任は活水女子専門学校英文科設立のための布石であったのである。

専門学校設立を目指すためには財政的基礎を確立しなければならなかったので、財団法人の活水女学財団を組織した。その最初の理事12名が決まり、活水女学校教頭奥太一郎もその1人となった。1918年7月1日、専門学校設置認可申請書は文部省に申請された。1919(大正8年)3月13日、各種学校としての活水女学校から切り離して、予科2年本科4年制、人文科と英文科を置く専門学校として認可された。

同年4月、奥太一郎は活水女学校教頭兼活水女子専門学校教授となった。やっと軌道に乗った翌1920年3月、活水女子専門学校校長マリアナ・ヤングは帰国した。

奥太一郎は五高で同僚(英語)だった遠山参良九州学院長から誘われていたので、九州学院に転任することになった。しかし、新任の校長ホワイトの要請もあり、校長を補佐するため、赴任を3ヶ月延期して1920(大正9)年9月、九州学院教頭となり、修身(聖書による道德教育。キリスト教人格教育)・英語を担当した。九州学院には神学部(ルーテル神学大学)があり、奥は⁷⁰ 日本福音ルーテル教会熊本教会に属し、神学部でも英文学を教えた。1921年2月24日、熊本教会から分離して九州学院教会(現・大江教会)が設立されたが、奥は妻キクと共に九州学院教会に移籍した。「⁷¹九州学院教会憲法」には妻キクと共に署名している。なお、九州学院寄宿舎を背にした九州学院神学部教授たちと神学生たちの集合写真(1921年撮影)がある。前列中央に創立者C. L. ブラウン博士、左隣に奥太一郎が座っている。

1923(大正 12)年 5 月、日本女子大学校教授として、東京に赴任した。この日本女子大学校への招聘はたぶん第 2 代校長麻生正蔵の働きかけであろう。麻生が奥太郎を日本女子大学校に招いたのは、同志社の先輩後輩の関係であったこと、北越学館で同僚となったことからであろう。前述のように、1908 年 8 月、奥太郎が五高英語教師探しに上京した時、寺田寅彦が奥の居所を探すため、日本女子大学校の麻生に問い合わせたことによっても、麻生と奥との深い関係を寺田が知っていたことがわかる。

25 年 8 月、日本女子大学校の桜楓会夏季英語講座を岸本能武太、正田淑子と共に勤める。『^{*72}日本女子大学英文科七十年史』では、

「せいはお高くはなかったが、一寸外人らしい御容貌で、その御授業には、何となく気楽に寛げる雰囲気があった。Dickens の "The Cricket on the Hearth" などをテキストに読解を担当されたが、文法の御説明は大変くわしかった。留学された上代先生のあとを引き継ぎ、附属高女でも教えられたが、惜しいことに昭和 3 年 10 月 13 日、59 歳で逝去された。」

とある。ここでも、誠実で生真面目な一面がうかがえる。東京でも日本福音ルーテル教会東京教会に所属して、平信徒として堅実な信仰を守り、良風を後進に永く遺した。

碓氷英学校・北越学館・東北学院・津山中学校・活水女子専門学校・九州学院・日本女子大学校での奥太郎の動向について、調査不十分のため、除籍謄本、履歴書、業績、本人の回顧追想、同僚教え子の回想挿話類は直接資料不足の難点を免れえない。漱石との交流は 1914 年 2 月 8 日付奥太郎宛書簡が最後で、漱石は 1916(大正 5)年 12 月 9 日、49 歳で易簣^{えきさく}した。

思うに、奥太郎は温厚誠実、律儀な性格で、学生生徒にも信頼されていたからであろうか、五高教師たちからは責任のみ重く、煩瑣で多忙で嫌われている舎監、生徒監、生徒課主任を永年精勤し、「職務勤勉ニ付其賞トシテ金百円下賜」という賞金を 16 年間で 10 回もらっている。その賞金の金額は上昇して 250 円にまで達した。前述のように 1910(明治 43)年 4 月 15 日には 12 年間 1 日も欠勤なく職務に尽瘁^{じんすい}し、教員として模範とすべしという賞状を文部大臣から受けた。これらは奥の勤勉さを表しているが、一方、謙遜な態度、義理堅い忠実さは、派手さに欠け、存在感の稀薄さに通ずる。五高に 16 年間在職した割にエピソードに乏しい。『^{*73}龍南回顧 ——第五高等学校創立八十周年記念出版——』には五高の教官・卒業生 156 編の回顧文が収録されているが、そのうち奥太郎在職当時の卒業生は 36 名執筆している。その中で思い出に残る恩師として奥太郎に触れた卒業生はたった 2 人、桜井時雄(1907 年・1 部卒業)と大野久磨夫(1913 年・1 部)だけである。桜井は奥の名を挙げただけ、大野は寄宿舎で大暴れして舎監の奥から「このようなところで飲み食いはやめろ」と叱られたことを書き記している。謙虚で地味な性格だったので、質実剛健、剛毅木訥の風がある五高生の印象に明記されなかったのでであろう。前記の『日本女子大学英文科七十年史』の回想記にしても、5 年という短期間ではあるが、地味で簡略な描写にとどまっている。

奥太一郎は1中学校教諭に過ぎなかった自分を高等学校教授に引き上げてくれた第五高等学校教授夏目金之助(漱石)を、終生恩義に感じて兄事した。漱石もまた温厚な奥太一郎を弟分のように鍾愛した。五高で僅か2年4ヶ月(奥の五高赴任から漱石の離熊まで)という短期間ではあるが、帝大時代から知友であった菅虎雄、狩野亨吉、山川信次郎を除けば、思いの外、濃密な交友関係を結んだ。しからば、漱石の作品上に何らかの影響を与えたであろうか。残念ながら、明確に奥太一郎を描いたと思われる登場人物は、見当たらない。割り合い地味で温和な奥は、漱石と共に謡曲を嗜んだが俳句は勧められたと思われるにも拘わらず、遂に句を残さなかった。

奥はキリスト教学校同志社に学び、碓氷英学校・北越学館・東北学院・活水女学校・日本女子大学のキリスト教学校で教鞭を執り、クリスチャンの妻を娶り、熊本・東京では日本福音ルーテル教会の堅実な信仰者であった。いつどこでキリスト教の洗礼を受けたかは、厳密に分からないが、兄亀太郎や弟菊次郎が、青年時代に京都で新島襄の影響で受洗したので、太一郎も京都時代に入信したであろう。1897年11月調査の『基督教名鑑』(教文館、1898年1月28日)には「岡山県津山尋常中学校(教頭)(組合)奥太一郎」とあり、1898年11月調査『基督教名鑑』には「熊本市第五高等学校(教授)奥太一郎」とあり、『日本基督教徒名鑑』(谷龍平、中外興信所、1916年2月25日)では「長崎県活水女学校」に「教員奥太一郎長崎市今町18ノ3」とあり、終始敬虔な振興をもち続けたことが窺える。五高時代は遠山参良・木村邦彦・丸山通一たちと五高キリスト者の集まり「⁷⁴花陵会」の賛助会員になっていた。キリスト教に一定の距離を置いていた漱石と宗教上でのような接点があったか、痕跡は見つからない。

奥は英語英文学研究者としての研究論文・著書・翻訳書などを残していない。第五高等学校時代の奥太一郎出題自筆の試験問題は、東北大学⁷⁵漱石文庫目録データベースとして「漱石文庫マイクロ版集成」に保管されている。また、五高時代の奥太一郎出題試験問題は現在も熊本大学五高記念館に保管されているということだ。熊本時代の漱石年譜は熊本大学に保管されている旧制第五高等学校関係資料を調査した⁷⁶「熊本時代の漱石年譜」が資料的に最も詳細である。この中に奥太一郎に関するものが、11項目にわたって記載されているが、煩雑になるので本論考ではすべて触れることをあえてしなかった。

奥太一郎は強烈な個性の持ち主ではなく、むしろ控え目な謙虚な人物だった。漱石から「大兄などの様な真面目な人」(1903年7月3日付)や「大兄の如き人は始終一日の如く御勤め」(1905年10月20日付)と書かれ、謹厳実直を絵に描いたような人物として受け取られ、小説のモデルにはなりにくい。従って強いて挙げるならば、『坊っちゃん』の中の「うらなり」的な「温厚特篤の士」であろう。

しかし、「うらなり」ほど、不当なことと知りつつ、抗議もせず、唯々諾々として長いものに巻かれる「底の知れないお人好し」ではない。奥は舎監、生徒監として質実剛健の五高生徒と永年渡り合ってきた。放埒無頼の青春真っ盛りの五高生を相手にすることが、いかに難儀なことか、漱石は既に『坊っちゃん』の中で描いている。教師たちから嫌がられる舎監を、漱石は「舎監杯は一日も致すべきものに無之と存候」(1905年10月20日付)といい、奥の真面目に感嘆している。舎監や生徒監という教師側の先頭に立って、生徒

側と折衝していくことは、教師たちの信頼がなければ、単にお人好しだけでは勤まらない。奥太一郎が永年にわたって舎監の煩瑣な職務を、重責を負って遂行したことは、教師としての使命感や人間としての人間愛があったればこそと言える。それはクリスチャンとして彼の良心の問題であろう。

その点で奥太一郎は五高英語教師の人事にも関与する積極的一面もあり、活水女学校や九州学院では教頭という管理職になり、活水女子専門学校認可を目指して活水女学財団の理事の1員になった。かくて奥太一郎は「うらなり」の「底の知れないお人好し」から脱却している。

漱石が『坊っちゃん』を執筆したのは、1906(明治39)年3月17日ごろから3月末まで、「うらなり」を造型する時、奥の人の好きが念頭に浮かんだかも知れない。奥太一郎宛の書簡でいうと、1905年10月20日から06年12月22日付までの間、この2通の書簡を詳細に検討すると、「うらなり」の原型をイメージすることができる。そして、主人公「坊っちゃん」の明るさの対極にありながら、「うらなり」の暗さは、送別会において自分を嘲弄愚弄する狸の校長や赤シャツ教頭に恭しくお礼を言う馬鹿馬鹿しいほどの善良さによって、「坊っちゃん」や山嵐のほろ苦い共鳴を呼び起こす役割を担った。漱石もまた嘗々と舎監の職務に^{じんすい}尽瘁する奥太一郎の中に、己にない一途な教育の原点をみる思いを禁じ得なかったであろう。こう考えると、奥も漱石の作品にある彩りを添えた人物といえるのではなからうか。

-
- *1 輝太郎＝『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年2月20日）の「奥亀太郎」（杉井六郎執筆）によれば、輝太郎は長男亀太郎の父で、岩倉具視の家臣、旧名を石川数馬といい、明治維新後、改名したという。次男太一郎、3男菊次郎の父でもある。維新後は岩倉に随伴して京都・東京間を往復したものと思われる。1885(明治18)年1月、夫婦共に受洗して京都四条教会に入会した。
- *2 亀太郎＝『日本キリスト教歴史大事典』の「奥 亀太郎」によれば、(生年不詳～1924年7月)日本組合基督教会伝道師、教員。父輝太郎・母まつの長男として生れる。1876(明治9)年12月10日西京第3公会創立の日、新島襄から洗礼を受け、79年10月西京第2公会に転会。81年6月同志社普通科英学校本科を、84年6月神学校英学校予科を卒業。大西祝らと共に学んだ。85年2月愛媛県小松教会伝道師、86年2月今治教会仮牧師、同年12月～88年3月熊本草場町教会主任伝道師、88年10月～91年2月福岡警固教会牧師、91年3月～92年2月島之内教会仮牧師を歴任。92年6月ハワイ伝道師岡部次郎とハワイに渡り、ホノルルのヒロ教会を牧し、94年6月まで日本人移民への伝道、教化に尽くした。アメリカ本土に渡り、修学。99年帰国後は東京で実業界に入り、明治火災保険に勤務。1902年以降は京都第一商業学校教諭として、英語教育に当たった。

【資料】『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年2月20日「奥 亀太郎」（杉井六郎執筆）。

- *3 菊次郎＝伊庭菊次郎。1873(明治6)年5月13日、滋賀県大津市堅田生れ。父奥輝太郎、母美恵(兄亀太郎の母は「まつ」とあるが後妻かは不明)の3男(『日本キリスト教

歴史大辞典』「伊庭菊次郎」では次男とあるが、兄は亀太郎、太一郎 2 人いるので 3 男だろう)。母方の家督を継いで伊庭姓となる。1889 年 M. L. ゴードンより京都四条教会で受洗。岩倉具視に勧められ、同志社入学、92 年 6 月普通学校を卒業、神学校本科に学び、95 年卒業。共愛女学校教師および前橋組合教会副牧師として赴任したが、98 年高等師範学校(現・筑波大学)に入学し、1901 年卒業。広島県立師範学校教諭、山口中学校、沼津中学校各教諭を、水戸中学校教頭を経て、1911 年 8 月、私立梅花女学校校長に招聘された。1913(大正 2)年高等女学校となし、22 年女子専門学校を開校し、両校の校長、理事長を兼任した。27(昭和 2)年梅花教会が組織されると、日本組合教会で按手礼を受け、30 年同教会牧師に就任した。第 2 次大戦後、新制中学校・高等学校を発足させ、学園復興に当たった。49 年辞任して名誉学園長となる。妻は監江、2 男 2 女がいる。1956(昭和 31)年 11 月 17 日死去。

【資料】『信仰三十年 基督者列伝』警世社、1921 年 11 月 28 日。

『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988 年 2 月 20 日「伊庭菊次郎」(茂義樹執筆)。

- *4 東京府＝第五高等学校保管の履歴書では、「東京府」のみ記されているが、活水学院の履歴書は、区・町・番地が記載されている。
- *5 平民＝五高・活水の履歴書に記載されたまま、記した。人権尊重の立場から封建身分制を温存した呼称は削除すべきかもしれないが、学術的立場から原文を尊重した。『日本キリスト教歴史大事典』「奥亀太郎」では、父輝太郎は岩倉具視の家臣というから、「平民」は不審である。キリスト教の信仰上の立場から平民を名乗ったものか。
- *6 京都＝本籍が東京府でありながら、京都で出生した経緯は、わからない。父輝太郎(旧名石川数馬)は岩倉具視の家臣だったというから、公家の陪臣である。従って、代々京都で暮らしてきたが、維新後東京に移籍したと思われる。しかし、やはり生活の本拠は京都に残っていたのではあるまいか。亀太郎・太一郎・菊次郎 3 兄弟は共に京都で受洗し、岩倉具視に勧められて同志社に入学した。『同志社校友会便覧』によると、亀太郎・太一郎・菊次郎とも、「出身府県」は「京都」になっている。
- *7 永松小学校＝下京区寺町綾小路下ル東入にあった。現在は不明。
- *8 明倫館＝京都の私塾明倫舎のあとに町衆によって 1869(明治 2)年に創立された学校のことか。当初は下京第三番組小学校といていたが、後に明倫小学校(京都市中京区室町錦小路上ル)と改称。1993(平成 5)年閉校。跡地は京都芸術センター。
- *9 同志社学院＝1875(明治 8)年 11 月 29 日、新島襄が京都に創立したキリスト教主義私立学校。76 年 9 月、京都市上京区今出川烏丸東入にある相国寺門前薩摩屋敷跡地の新校舎に移転した。同年秋、熊本洋学校の廃校により、熊本バンドの人々が編入学して英学校は活気を呈した。

【資料】『同志社校友会便覧』今井隆吉編、1900 年 12 月 27 日。

『同志社百年 史』通史編・資料編、1979 年。

- *10 碓氷英学校＝1886(明治 19)年 7 月、群馬県碓氷郡原市に宮口二郎(原市教会員。政治家・養蚕製糸業者)らによって創立。教科内容は慶應義塾、同志社神学校などの規則書を参考に立案された。教師は同志社に学んだ人物が多かったが、寄付金、生徒が集まらず、運営に行き詰まり、88 年 4 月に廃止された。奥太一郎が碓氷英学校に

赴任したのが、廃校後の同年 10 月ということは、再建されたということだろうか。

【資料】萩原進『明治時代群馬県史』国書刊行会、1980 年 10 月。

『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988 年 2 月 20 日（原誠執筆）。

- *11 北越学館＝ 1887(明治 20)年 10 月、新潟市に成瀬仁蔵らにより開校したキリスト教主義男子学校。1888 年 8 月、アメリカ留学から帰国した内村鑑三が北越学館教頭として招かれたが、宗教臭の問題で宣教師・牧師らと対立、12 月、生徒側に立つ内村は辞職した。「北越学館事件」で内村が去った後、麻生正蔵らが招かれ、同志社の後輩奥太郎と呼ばれたのであろう。1893 年 3 月廃校。

【資料】『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988 年 2 月 20 日（本井康博執筆）。

『近代新潟におけるキリスト教教育 ——新潟女学校と北越学館——』本井康博、思文閣出版、2007 年 11 月 28 日。

- *12 東北学院＝ 1886(明治 19)年初夏、押川方義とアメリカ・ドイツ改革派教会宣教師 W.E.ホーイが協力して開設した私塾形式の仙台神学校が起源のキリスト教主義学校。91 年に東北学院と改称した。仙台市南六軒町にあった。

【資料】花輪庄三郎編『東北学院七十年史』『東北学院七十年写真誌』1959 年 7 月 20 日。

『東北学院百年史』資料編・各論編、3 冊、1989～1991 年。

- *13 帝国大学文科大学＝ 1886(明治 19)年 3 月 2 日、帝国大学令が公布され、従来の東京大学は帝国大学に改組され、大学院と法・文・理・工・医の五つの分科大学(1890 年農科大学も加わる)で構成される。

【資料】『東京帝国大学五十年史』上冊、1932 年 11 月。

- *14 撰科生＝『帝国大学一覽』の「分科大学通則」中に「撰科規程」があるが、その第 1 条には「各分科大学課程中 1 課目又ハ数課目ヲ選ヒテ専修セント欲シ入学ヲ願出ツルトキハ各級正科生ニ欠員アルトキニ限り毎学年ノ始メニ於テ撰科生トシテ之ヲ許可ス」とある。「撰科」は「選科」と書くこともある。

活水女学校提出修業証書(写し) 〈肩書省略〉

「奥 太郎 文科大学撰科生トシテ左ノ科目ヲ修メ試問を完ウセリ仍チ之ヲ證ス
哲学科 哲学概論、西洋哲学史、美学及美術史 Dr. R. Koeber。国文学 黒川真頼
漢文学 島田重禮、田中義成。 ^{ラテン}羅匈語 神田乃武。英語 オーガスタス・ウッド。
独逸語 Dr. K. Florenz。史学 Dr. Ludwig Riess、箕作元八。力物学飯島魁。
論理学及知識論学 中島力造。社会学 外山正一。心理学 元良勇次郎。教育学 野尻精一。
精神病論 榊俣。 右教員ノ証明ヲ認了シ授クルニ修業證書ヲ以テス

明治三十年五月二十五日 文科大学長正一位勲三等文学博士 外山正一^(ママ)

- *15 尋常中学校＝ 1886(明治 19)年 4 月 10 日、中学校令が公布され、中学校は尋常中学校と高等中学校の 2 つに分けられ、尋常中学校は各府県に 1 校設置された。1899(明治 32)年 2 月中学校令が発令され、5 月から尋常中学校は中学校と改称され、1948(昭和 23)年 4 月、戦後の学制改革で新制の高等学校となった。高等中学校は 1886 年に全国 5 校(第一東京、第二仙台、第三京都、第四金沢、第五熊本)できたが、1894

(明治 27)年 6 月 25 日、高等学校令が公布され、高等中学校は高等学校と改称され、1949 年 4 月、戦後の学制改革で新制の大学に移行した。

- *16 尋常師範学校 = 1886(明治 19)年 4 月 10 日、師範学校令が公布され、各県に尋常師範学校(小学校教員養成)を設置し、東京に高等師範学校(中等学校教員養成)設置した。
 - *17 第五高等学校 = 1886(明治 19)年 11 月 30 日、高等中学校の設置区域を定め、長崎・福岡・大分・佐賀・熊本・宮崎・鹿児島 の 7 県を第五区とした。1887 年 11 月 14 日、第五高等中学校が熊本市黒髪町で第 1 回入学式を挙行、授業を開始。1894 年 9 月、第五高等学校と改称された。
- 【資料】『五高五十年史』第五高等学校開校五十年記念会、1939 年 3 月 3 日。
『五高七十年史』五高創立七十周年記念会理事長 高森良人、1957 年 10 月 11 日。
- *18 高等官 = 旧憲法下における官吏等級の 1 つ。その任免に天皇の裁可を要するもの。判任官の上位。親任式をもって叙任する親任官と、1 等官から 9 等官に分かれる。1 等官、2 等官を勅任官、3 等官以下 9 等官までを奏任官といった。
 - *19 瑞宝章 = 1888(明治 21)年、官吏や軍人などの多年功労者に授与するために制定された勲章の 1 つ。社会・公共のために功労のある者に対して授与される勲章。
 - *20 活水女学校 = 1879(明治 12)年 12 月 1 日、エリザベス・ラッセル宣教師によって、長崎に創立された。82 年 6 月、東山手 13 の現在地に校舎を新築。ヨハネ 4 章 10 節にちなんで活水女学校と命名。1887(明治 20)年初等科・中等科・高等科・神学科・技芸部を置く。

【資料】『活水学院百年史』1980 年 3 月 31 日。

- *21 九州学院 = 1910(明治 43)年 1 月 19 日、アメリカ南部一致ルーテル教会宣教師チャーチルズ・L. ブラウン博士により設立認可される。1911 年、遠山参良が初代院長に就任。開校。宣教師宅で神学教育を受けていた者も、九州学院神学部へ吸収された。第 1 回 入学生 122 人。1913(大正 2)年文部省より認定。1914 年校訓を「敬天愛人」と定める。1915 年文部省より指定。1916 年第 1 回卒業式挙行。1921 年九州学院教会設立。

【資料】『創立二十周年記念誌』九州学院、1931 年 10 月 1 日。

『九州学院七十年史』九州学院、1981 年 10 月 30 日。

- *22 遠山参良 = (1866 ~ 1932) 英語学者・教育者。熊本県八代郡鏡町生れ。熊本私立古城洋学校、同志社を経て、長崎の加伯利学校(鎮西学院)を卒業。アメリカ・オハイオ州ウェスレアン大学卒業、長崎県私立鎮西学院教師、活水女学校講師。1899 年 8 月 7 日、第五高等学校英語講師、1900 年 1 月 22 日、同校教授。1910 年 9 月 30 日退官。講師。1911 年私立九州学院初代院長。1918(大正 7)年 1 月 11 日、福岡女学校初代理事長に就任。1932(昭和 7)年院長のまま召天。漱石と遠山との交流については『九州学院七十年史』に述べられている。

【資料】日本福音ルーテル教会編『キリストの証人』1969 年。

稲富肇『故遠山参良先生』1933 年 12 月。

- *23 日本女子大学校＝1901(明治34)年4月20日成瀬仁蔵らによって創設された女子高等教育専門学校。2代目校長麻生正蔵と協力して単なる良妻賢母主義ではなく、「人として、婦人として、国民として」人間教育を第一とし、「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の3つを教育実践綱領とした。1949(昭和24)年4月、新制大学となり、「日本女子大学」と改称。
- 【資料】中村政雄『日本女子大学校四十年史』1942年4月。
- *24 狩野亨吉＝(1865～1942)哲学者、教育者。秋田県大館町生れ。1890年帝国大学哲学科卒。四高、五高教授・教頭、一高校長、京都帝国大学文科大学初代学長。晩年は書画鑑定・著述業。
- 【資料】『狩野亨吉遺文集』安倍能成編、岩波書店、1958年11月1日。
『狩野亨吉の生涯』青江舜二郎、明治書院、1974年11月30日。後に中公文庫。
『狩野亨吉の思想』鈴木正、第三文明社、1981年3月30日。後に平凡社ライブラリー
『伝・狩野亨吉』渡部和夫、秋田魁新報社、1985年4月。
- *25 菊池謙二郎＝(1867～1945)歴史学者、教育者。号は仙湖。水戸生れ。1893年帝国大学国史学科卒。山口高校教授、1895年8月～97年3月津山中学校長、二高校長、東亜同文書院教頭兼監督、南京三江師範学堂総教習、水戸中学校長。衆議院議員。
『新定東湖全集』刊行。菊池は津山中学校で9ヶ月間奥太一郎の上司だった。
- 【資料】『菊池謙二郎』森田美比^{よしちか}、耕人社、1976年9月10日。
- *26 赤木通弘＝宮崎県生れ。1897年帝国大学哲学科卒。1897年9月9日から98年1月12日まで五高で英語・論理学教授。
- *27 奥泰二郎＝1897(明治30)年12月17日菊池謙二郎宛漱石書簡「津山尋常中学の英語教授奥(泰二郎氏か)は其後矢張同校に奉職被致居候や——中略——奥氏待遇上の希望杯も序に御問合被下度候 又同氏は検定試験合格者と記憶致し居候が如何 それも御知らせを乞ふ」(岩波書店『漱石全集』第22巻、書簡番号138、1996年3月19日)。
- *28 神田乃武＝(1857～1923)英語学者。東京生れ。神田孝平の養子。アマースト大卒。一高教授、帝国大学教授、外国語学校教授、貴族院議員。
- 【資料】『神田乃武先生 追悼及び遺稿』刀江書院、1927年7月15日。
『近代文学研究叢書』第23巻、昭和女子大学、1965年。
- *29 月俸65円＝1898(明治31)年3月7日奥太一郎宛漱石書簡「待遇は六拾五円の月俸にて当分囑託と申す条件に有之候」(『全集』22巻、147)
- *30 3月18日＝1898年3月18日付奥太一郎宛漱石書簡「不得已事故御出来の由にて御転任なりがたき由敬承仕候 左りながら今回の事は御申越の如くに貴電到来の日迄最後の手続見合せ居後御申越により始めて文部省へ上申仕候次第にて当校にては既に大兄をのみ宛に致し居候事とて只今に至り御断候にては小生が学校に対する瀋陽の失墜は兎に角校長及び教頭の迷惑は当然の事と存候 因って御事情の如何に関せず直ちに返電差上候次第不悪御諒察下度右甚だ我儘の申条かは存じ不申候へども愚見相述御再考願ひ度と存候」(『全集』22巻、149)

- *31 中川元＝(1851～1913)。教育者。長野県飯田生れ。貢進生に選ばれ、大学南校に学ぶ。東京外国語学校教諭。文部省に入る。フランス留学。文部卿秘書官。文部省視学官。第四高等学校長、第五高等学校長、第二高等学校長、仙台高等工業学校長。
 【資料】『中川元先生記念録』故中川先生頌徳謝恩記念資金会、1918年3月26日。
 『中川元小伝』中川浩一『旧制高等学校史研究』7～9号、1976年1、4、7月。
- *32 『漱石の思ひ出』＝夏目鏡子述・松岡讓筆録(改造社、1928年11月23日)「8『草枕』の素材」。
 「蚕の頃になつて、狩野亨吉さん、山川さん、奥太一郎さん、木村さん、それに夏目の五人連れで、朝早く小天にいつて、湯の浦の別荘で中食をしたため、本宅がみたいからといふので、姉さんが案内されたさうです。本宅といふのは湯の浦の別荘から少し離れた山の中腹にあつて、白く塗つてあつて、遠見は丁度城のやうな家ださうで、二三里も先からみえたといふから大したものだつたのでせう。」
- *33 山川信次郎＝(1867～?)英語教育者。埼玉県入間郡原市場村生れ。第一高等中学校卒、帝国大学英文学科卒。五高教授、一高教授、浄土宗大学宗教大学英語教授、長崎高等商業学校教授、東京高等師範学校講師、五高教授。1915(大正4)年7月、休職満期。漱石は若いころ山川と親しかったが、晩年山川に対して批判的になった。
 【資料】『夏目漱石と菅虎雄——布衣禅情を楽しむ心友——』「膠漆の友去る」原武 哲、教育出版センター、1983年12月。
- *34 木村邦彦＝英語担当。1898年8月19日講師。99年9月5日教授。1901年5月29日辞任。(『五高五十年史』1939年3月3日)。小天温泉行きが5、6月ごろであるとすれば、8月赴任の木村は参加していないことになる。
- *35 前田案山子＝前田覚之助。大同倶楽部領袖。第1回衆議院議員。熊本県玉名郷区長。帝国議会の3美髯の1人。
- *36 前田卓子＝(1868～1938)前田案山子の2女。一度結婚して離婚、実家に帰っていた1897(明治30)年暮れ、漱石と山川信次郎が小天温泉に来た時、初めて会う。『草枕』の那美のモデルと言われている。後に結婚して東京目白の奥の雑木林の中の一軒家に住んでいた。
 【資料】岩波書店『漱石全集』月報、第1号「漱石先生言行録1」「『草枕』の女主人公」1935年10月。
- *37 元日の屠蘇＝[子規へ送いたる句稿 32 75句](1899年1月)(『全集』17巻、1431～1496)
- *38 桜井房記＝(1852～1928)教育者・物理学者。石川県金沢生れ。貢進生、大学南校物理学科卒業。東京師範学校、フランス留学、東京高等師範学校、1890年2月12日第五高等学校教頭、1900年4月13日五高校長。1907年1月16日依願免官。日置流弓術の免許状を持ち、宝生流能楽の奥伝に達し、脇能の免許も持っていた。
- *39 第五高等学校卒業記念写真＝『漱石写真帖』松岡讓編、(第一書房、1929年1月9日。51)

- *40 書簡 = 1899年7月12日付狩野亨吉宛漱石書簡「地方より東京へ転任と云ふ点より見ればことに本人の請願とある上は年俸千円にても不都合は無之べきか」
- *41 熊本女学校 = 1886(明治19)年、徳富久により女子教育機関設立が発案、87年3月、世話人不破つる、教育担当徳永規矩夫妻により熊本女学会を発足。同年5月創立の英語学会(熊本英学校)附属女学校となる。初代校長は海老名弾正。英学校は96年3月廃校となるが、97年1月女学校は再認可され、3月竹崎順子校長となる。1929年2月大江高等女学校認可。1948年4月大江女子高等学校となり、大江高等学校、フェリス女学院高等学校、熊本フェリス学院高等学校となる。卒業はしなかったが、高群逸枝も通学した。
 【資料】『七十五年の回顧』大江高等学校抱節会、1963年6月10日。
 大江高等学校編『創立九十周年記念誌』1978年。
- *42 竹崎順子 = (1825 ~ 1905)教育家。肥後上益城郡津森村の惣庄屋矢嶋直明の3女。妹に徳富一敬の妻久(蘇峰・蘆花の母)、横井小楠の妻津世子、矢嶋楯子らがいる。1840(天保11)年玉名郡伊倉の農家竹崎家の養子律次郎(茶堂)と結婚。熊本に出て、夫が経営する日清堂で女生徒を教えた。87(明治20)年10月熊本で受洗。89年熊本女学校初代舎監。97年熊本女学校校長となり、8年間校長として学校運営にかかわり召天。校母と讃えられた。
 【資料】徳富健次郎(蘆花)『竹崎順子』(福永書店、大正12年4月21日。後に『蘆花全集』第15巻、新潮社、昭和4年11月5日に収録)。
 『七十五年の回顧』大江高等学校抱節会、1963年6月10日。
 上村希美雄『民権と国権のはざま』「みそ汁ヤソの灯——竹崎順子」葦書房、1976年2月20日。
- *43 熊本草場町教会 = 日本基督教団教会。1885(明治18)年7月、同志社卒業の辻密太郎によって熊本伝道が始まる。86年12月、5代目伝道師奥亀太郎が来任、87年英語学会(後の熊本英学校)を創立して同会主任を兼ねた。同年宣教師O. H. ギューリック夫妻が着任して、教会と学校を助けた。同年9月、海老名弾正が赴任して牧会3年、その間、海老名は熊本英学校、熊本女学校の校長も兼ね、教勢は盛んとなり、講義所は仮教会に認定された。海老名の転出後、1年間柏木義円が牧会。3度の移転後、92年熊本市草場町の現在地に新会堂が落成。同年熊本英学校事件が起こり、同校は分裂、後に廃校となり、教会の信徒は四散した。97年藤原直信の赴任により教会の新たな基礎固めがされ、1913(大正2)年和田信次の就任に際し、教会は独立して日本組合熊本基督教会と称した。
 【資料】『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年2月20日。(矢崎邦彦執筆)
 『日本組合熊本基督教会沿革』1926年1月。
 国宗晋『熊本草場町教会物語』全2巻、1961年4月。
- *44 84歳 = 『七十五年の回顧』(大江高等学校抱節会<1963年6月10日)中村アイ「ありがたい学校」による。90頁。
- *45 浜屋 = 浜崎曲汀『熊本時代の夏目漱石』(『文藝春秋』1934年7月号)による。「浜

屋」は「現・熊本県八代市日奈久中西町 418、福田クリニック産婦人科内科のあたり」という。村田秀明・谷口絹枝「熊本時代の漱石年譜」『方位』第 19 号「熊本の漱石」熊本近代文学研究会、によれば、日奈久温泉地図および浜屋については、日奈久観光案内および武士屋旅館の穂多田正典の情報である。

- *46 藤代禎輔＝(1868～1927)独文学者。号は素人。千葉県検見川生れ。帝国大学独文学科卒。第一高等学校教授、東京帝国大学講師、ドイツ留学、京都帝国大学教授、京都市立絵画専門学校校長兼京都市立美術工芸学校校長。京都帝国大学文学部長。

【資料】『芸文』藤代博士追悼号、京都文学会、1927年7月1日。

『独逸文学』第3輯、京大教授藤代博士追悼号、東京帝国大学独逸文学研究室、1928年6月5日。

『近代文学研究叢書』第26巻、昭和女子大学、1964年12月1日。

- *47 芳賀矢一＝(1867～1927)国語国文学者。福井生れ。宮城中学校卒。大学予備門、帝国大学国文学科卒。第一高等学校教授、東京帝国大学助教授。ドイツ留学。東京帝国大学教授。国学院大学長。

【資料】『芳賀矢一文集』芳賀檀編、富山房、1937年2月6日。

「芳賀先生伝記資料」島村剛一『国学院雑誌』1938年6月～39年12月。

『近代文学研究叢書』第26巻、昭和女子大学、1964年12月1日。

- *48 学術上取調＝熊本大学保管旧五高関係資料「奥太一郎履歴書」。

- *49 復命書＝「英語授業視察復命書と奥太一郎——明治30年代英語教育史研究2——」隈慶秀、『英学史論叢』第9号、日本英学史学会中国・四国支部、2006年5月27日。「英語授業視察復命書と奥太一郎 その2——明治30年代英語教育史2——」隈慶秀、『英学史論叢』第10号、日本英学史学会中国・四国支部、2007年5月26日。

- *50 便り＝1901(明治34)年7月22日付漱石日記「熊本の奥」。

- *51 長崎入港＝夏目金之助の「英国留学始末書」(明治36年1月26日付、文部大臣男爵菊池大麓宛)によると、「同36年1月20日長崎港着 同21日熊本着」とあることにより、長崎港停泊中いったん熊本に帰任したという説があるが、予定通りに到着・出港しない当時の航海事情や帰国途中の情報不足の中で22日正午長崎出港に間に合うように熊本帰任のスケジュールを組むことは実際上困難だろう。もし五高に帰任していたならば、桜井房記校長、渡辺又次郎教頭、遠山参良英語科主任、奥太一郎たちの出迎えを受けているはずである。しかし帰任した漱石に会った者は誰もいない。漱石が単に書類だけの形式を整えるために虚偽を書くはずはないという意見もあるが、漱石は五高を辞任するために、呉秀三に神経衰弱の診断書を書いてくれるよう、菅虎雄に依頼しているところをみると、形式を整えることに対して厳格には考えていないと思われる。

- *52 中根重一＝(1851～1906)官僚。漱石の岳父。広島県福山生れ。貢進生。大学東校入学、中退。新潟医学所助教授。法制局参事官兼書記官、逓信省参事官、貴族院書記官長。長女鏡子が差卯席と結婚。行政裁判所評定官、内務省地方局長。晩年は借金に苦しめられ、金策と就職運動に奔走した。娘婿漱石の青臭さが気に入らず、疎遠になった。

【資料】『漱石と越後・新潟』安田道義、新潟日報事業社出版部、1988年。

- *53 03年3月8日＝1903(明治36)年3月8日付奥太一郎宛漱石書簡「矢張熊本向へ下向の筈の処色々事情有之当地にとゞまる事と相成候に就ては当分乍遺憾不得拝顔目下英語部の状況如何に御座候や」(『全集』22巻、261)。
- *54 スウィート＝漱石の表記は「スキート」。William Edward Laxon Sweet。第五高等学校長桜井房記の依頼(1901年5月23日漱石日記)で西洋人の英語教師1名を五高に招聘したいというので人選を任された。King's CollegeのProf. Halesに手紙を出し、候補者の推薦(29日日記)を依頼した。6月8日、King's CollegeでSweetに会う。14日、Sweetからの手紙で質問があったのだろう、返事を書く。桜井校長にも手紙を出す。Sweetからの返事では3年契約を希望している。22日、King's CollegeでSweetと再度会う。これでSweetの日本行きはほぼ決まったと思われる。8月10日、桜井校長から電報が来たが、たぶんSweetの採用人事が決定したのだろう。その日にSweetに手紙を出している。30日、漱石はAlbert Dockに日本に赴任するSweetを見送った。漱石が世話したので、Sweetの五高での評判は気になっていた。1901年10月16日就任、1906年7月31日(『五高五十年史』では06年であるが、『五高七十年史』では09年とある。どちらが正しいか未調査)退任した。3年契約を希望していたが、5年間在任したところを見ると、よほど評判がよかったのであろう。
- *55 ファーデル＝Henry L. Fardel。1866年1月18日、スイス生れ。1884年、ローザンヌ大学においてバチェラー・オブ・アーツの学位を取得。1887年来日。横浜ビクトリア学校の副校長、92年校長となる。1894年12月1日、ラフカディオ・ハーンの請いにより、五高に就任。英語・フランス語担当。1903年7月30日退任(『五高五十年史』による)。漱石の五高在任はファーデルと完全に重なる。ファーデルの五高解職の理由はわからないが、1903年、東京高等商業学校(現・一橋大学)に転じ、さらに高知県立第一中学校、上海パブリック・スクールなどに勤務、1923年9月の関東大震災で亡くなったという。
- 【資料】「旧制第五高等学校外国人教師に関わる調査・研究(その2)」池辺和彦『熊本工業大学研究報告』第25巻第1号、2001年3月。
- *56 同年4月13日＝1903年4月13日付奥太一郎宛漱石書簡「御地英語部内の状況逐々御報知被下先々無事に進行致居候模様安心致居候」(『全集』22巻、268)。
- *57 同年7月3日＝1903年7月3日付奥太一郎宛漱石書簡「小生は高等学校と大学とかけもちにて両方とも碌な事は致せもせず致そうともせず勝手好加減主義にてやり居候」(『全集』22巻、280)。
- *58 書簡＝1905年10月20日付奥太一郎宛漱石書簡「熊本も其後大分移動有之候の様子奈須川君には当地にて一寸面会致候」(『全集』22巻、477)。このころの奥の住所は熊本市内坪井町127番地である。
- *59 奥太一郎からの書簡＝1906年12月22日付奥太一郎宛漱石書簡「御手紙拝見其後は御無沙汰実は大多忙にて始終齷齪致し居りたるために候」(『全集』22巻、745)。
- *60 広田先生の言葉＝「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より…」(『三四郎』1の8)(『全集』5巻)
- *61 俣野義郎＝漱石五高時代の教え子。五高卒業後、東京帝国大学法科大学卒業。満鉄社員、大連旬報社長、公益公司出張所長、大連市会議員。「多々良三平と自任せる俣

野義郎なるもの五、六度も親展至急で大学へむけ猫中の取消を申し来る。新聞で広告して取り消してやろうかと云つたら御免と云ふてきました。当人は人格を傷けられたとか何とか不平をいふて居る。呑気なものである。人身攻撃も文学的滑稽も区別が出来ないで自ら大豪傑を以て任じて居るのは余程氣丈の至りだと思ふ(1905年12月31日鈴木三重吉宛漱石書簡)

【資料】『喪章を着けた千円札の漱石 ——伝記と考証——』「『吾輩は猫である』中の久留米の住人・多々良三平 一崎人・俣野義郎のこと」原武 哲、笠間書院、2003年10月22日。

*62 同年5月29日＝1907年5月29日付奥太一郎宛漱石書簡「其後は打絶頓と御無沙汰に打過候処忽然芳音に接し感謝」(『全集』23巻、839)。

*63 寺田寅彦＝(1878～1935)随筆家・物理学者。漱石・奥五高時代の教え子。五高卒業後、東京帝国大学理科大学物理学科卒業。ドイツ留学後、東京帝国大学理科大学教授。「寺田寅彦日記」1908年8月16日、19日、20日、21日、22日(『寺田寅彦全集』第19巻、岩波書店、1998年8月6日)。

*64 麻生正蔵＝1864(文久4)年1月9日、豊後(大分県)玖珠郡東飯田村に生まれた。1882年京都の同志社英学校普通科に入学し、新島襄に師事した。1887(明治20)年6月同志社英学校英語科卒業、同年9月同志社神学校に入学したが、88年帝国大学文科大学哲学科選科生となる。1889(明治22)年北越学館教授となり、新潟女学校創設に尽力していた成瀬仁蔵や奥太一郎との交流が始まる。92年成瀬が関係していた梅花女学校教頭に就任した。1894(明治27)年9月から97年まで同志社女学校専門科の教師を歴任した。成瀬仁蔵と共に日本女子大学創設に努め、1901(明治34)年開校とともに学監となり、倫理学、教育学を教授した。1919(大正8)年第2代校長になった。1949(昭和24)年11月28日、85歳で死去した。

【資料】『日本女子大学四十年史』日本女子大学、1942年4月。

『麻生正蔵著作集』日本女子大学、1992年3月31日。

*65 渡辺又次郎＝倫理学・論理学・心理学担当。1900年8月2日第五高等学校教頭。1907年1月24日辞任(『五高五十年史』)。『近世倫理学史』哲学館、1898年刊。

*66 森卷吉＝(1877～1939)。英文学者。石川県出身。1904(明治37)年東京帝国大学英文学科卒業。1909年第一高等学校教授。1929(昭和4)年7月2日第一高等学校校長。4月22日退任。

*67 西村濤蔭＝本名は西村誠三郎。一高を中退か。早稲田大学卒業(「満洲早稲田大学校友会」名簿。『明治四十五年満洲商工人名録』)。小説家志望。漱石の木曜会に出席。『三四郎』『文学評論』の校正を手伝う。漱石から借金をする。漱石宅の書生として^{よしぞえ}寄宿。夏目家の御手伝いお梅(漱石の媒酌で美添紫気と結婚)の兄。1909年満洲に渡り、満鉄、満洲日々新聞社勤務。後に満洲宣伝協会会長。著書に『満洲物語』(1942年)。

*68 由比質＝(1870～1930)。西洋史担当。高知県出身。1896年7月帝国大学史学科卒業。山口高校を経て1907年2月2日第五高等学校教授。教頭。生徒監。1913(大正2)年10月13日辞任(『五高七十年史』)。第三高等学校教授。1919年4月15日松山高等学校長。第七高等学校長。

- *69 活水女子専門学校＝1919(大正8)年活水女学校大学部を改組し、専門学校令により活水女子専門学校を設置し、英文科を置く。1922年活水女学校専門部に家政科を置く。

【資料】『活水学院百年史』1980年3月31日。

- *70 日本福音ルーテル教会熊本教会＝福山猛『日本福音ルーテル教会史』1954年4月30日。ルーテル社。
- *71 「九州学院教会憲法」＝九州学院高等学校教頭藤本誠氏の御教示によると、

九州学院教会憲法

1. 名称並ニ所属 本教会は日本福音ルーテル教会ニ属シ九州学院教会トテ称ス
2. 教義ノ基礎
 - (イ) 神ノ啓示タル旧新約聖書ヲ以テ信仰ト生活ノ基準トス
 - (ロ) 使徒信經ニケヤ信經アウグスブルグ信条ヲ以テ信仰ト生活ニ関スル聖書ノ教ヲ正確ニ表示スルモノトス
 - (ハ) ルーテルノ教理問答ヲ以テ求道者及年少受洗者ノ宗教教育ニ最モ適當ナルモノトス

(途中不明)

員会ニ提出シ役員会ハ予メ修正案ト開会ノ日時及場所トヲ二回ノ日曜礼拝ニ於テ報告スベシ

左記ノ者ハ本憲法ヲ承認シテ九州学院教会ヲ組織ス

大正拾年貳月貳拾四日

とある。なお、本憲法を承認し署名した者の中に「奥太郎」、「奥キク」の名はあるが、「遠山参良」の名はない。遠山参良はメソジスト会員だったので、自分は九州学院教会には所属せず、妻の「遠山うて」のみ入会している。

- *72 『日本女子大学英文科七十年史』＝1976年7月3日発行。
- *73 『龍南回顧 ――第五高等学校創立八十周年記念出版――』＝東京五高会[1967(昭和42)年10月10日]
- *74 『花陵会』＝『五高・熊大キリスト者の青春 ――花陵会100年史――』熊本大学YMCA花陵会、1996年12月1日。
- *75 漱石文庫目録データベース＝奥太郎出題の自筆試験問題は8部あり、①工理農1年1900年3月27日 ②工理農2年1899年3月30日 ③工理農1年1898年12月 ④工理農1年1899年6月26日 ⑤法科1年 ⑥法科1年1898年6月30日 ⑦法科1年1899年6月29日 ⑧工理農2年1899年6月23日実施のものが保管されている。インターネットで検索できるが、不鮮明で判読困難である。
- *76 「熊本時代の漱石年譜」＝『方位』「熊本の漱石」第19号、「熊本時代の漱石年譜」村田秀明・谷口絹枝、熊本近代文学研究会、1996年9月25日。

〈付記〉

資料収集では31年前、熊本大学の旧五高関係書類を調査した時のものを使用した。活

水女子大学奥野政元学長、九州学院高等学校藤本誠教頭、福岡県立明善高等学校隅慶秀教諭、同志社大学校友平岡正君の御協力には深く感謝申し上げます。

本稿は夏目漱石・寺田寅彦・奥太郎・徳富蘆花側からの少ない資料を用いたが、戸籍謄本(除籍謄本)が取れず、遺族・子孫・墓地も不明で、出身校、勤務校からの原資料発掘も個人情報保護の立場から困難を極めている。地道に資料を探索する以外、方法がないのが、実情である。

(文責 山口範子)

※ 初出 : 『近代文学論集』第 35 号 (日本近代文学会九州支部 2009 年 11 月 30 日)